

## B・シンメルペニヒ『ローマ教皇庁の歴史 古代からルネッサンスまで』

刀水書房、2017年、459頁

## 大塚 将太郎

本書は、Bernhard Schimmelpfennig, *Das Papsttum. Grundzüge seiner Geschichte von der Antike bis zur Renaissance*, Darmstadt, 1984の第六版(2009年)を、甚野尚志氏・成川岳大氏・小林亜沙美氏らが邦訳したものである。著者についての紹介は訳者あとがきにおいて十分になされているため、ここでは詳細は割愛するが、補足として、現在の教皇庁研究をリードする人物であるクラウス・ヘルバースの評価を簡潔に紹介したい。20世紀後半まで、ドイツにおける中世教皇庁の歴史記述の目的は各著者自身の宗派によって規定されてきたが、自らの宗派に囚われない研究者が現れることでその問題は乗り越えられた。その次の世代の研究者として登場したのは、それまでとは異なる研究関心や視点を持つ人々であった。すなわち、『偽イシドルス教令集』の研究で有名なホルスト・フールマン<sup>1</sup>、教皇廃位の問題について扱ったハラルド・ツィンマーマン<sup>2</sup>、そして典礼の研究で業績を上げたベルンハルト・シンメルプフェニヒである。ヘルバースは、シンメルプフェニヒの研究が象徴を用いたコミュニケーション、儀礼、支配権の明示といったテーマと中世教皇庁というテーマを結びつけることに成功し、教皇庁研究に新たな研究領域を作り出した、と述べて高く評価している<sup>3</sup>。シンメルプフェニヒも自らの研究の意義を強く意識しており、本書のほとんどの章で典礼の問題が言及されている。その他に、政治、教義、法、制度といった多角的な面から中世教皇庁の実態が描かれ、非常に読み応えのあるものとなっている。

本書の第六版が刊行された後も、中世教皇庁の概説書としては、トーマス・フレンツやクラウス・ヘルバースのものが出版されている<sup>4</sup>。前者は、通史を概観した後にテーマ別にさらに説明を行う形を取っており、図や表が多く使われているなど、読者の理解を助ける工夫がなされているが、注が一切付いておらず、また各説明も分量が少ないためにかなり物足りないものとなっている。一方、ヘルバースの概説書は、現時点で最良の中世教皇庁のモノグラフとして高く評価されている。彼の概説書が本書と比べて優れている点は、すべての記述に詳細な注がついていること、2009年以降の最新の研究文献が記載されていることだろう。それにもかかわらず、本書は、ゲ

<sup>1</sup> H. Fuhrmann, *Einfluß und Verbreitung der pseudoisidorischen Fälschungen. Von ihrem Auftauchen bis in die neuere Zeit* (Monumenta Germaniae Historica Schriften, vol. 24), 3 vols., Stuttgart, 1972-1974などを参照せよ。

<sup>2</sup> H. Zimmermann, *Papstabsetzungen im Mittelalter*, Graz, 1968.

<sup>3</sup> K. Herbers, *Geschichte des Papsttums im Mittelalter*, Darmstadt, 2012, pp. 14-15.

<sup>4</sup> Th. Frenz, *Das Papsttum im Mittelalter*, Köln u.a., 2010; K. Herbers, *op. cit.*.

オルク・シュトラックが「それでもなおシンメルプフェニヒの著作はジェフリー・バラクロウやヴァルター・ウルマンのものと同様、古典として一読の価値がある。」と評しているように<sup>5</sup>、彼だけでなくドイツの教皇庁研究者から現在でも高い評価を得ているものである。事実、ヘルバーズの概説書を開いてみると、彼が専門としている初期中世を除けば、盛期中世以降や中世教皇庁の全体像に対する捉え方はシンメルプフェニヒの概説書との類似点が多く、本書からの影響を大きく受けていることが良く分かる。この点からも、本書の影響力の大きさを理解することができる。

次に、各章の内容を簡潔にまとめたい。

・第1章「コンスタンティヌス大帝期までのローマのキリスト教信徒共同体」

ここでは、コンスタンティヌス大帝によるキリスト教の公認に至るまでの、都市ローマにおけるキリスト教共同体の姿が描かれている。2世紀までに、ローマの信徒共同体とローマ司教が使徒ペトロとパウロの事績と結びつけられ、後に教皇の地位が上昇していくための基礎が出来上がる過程が記されている。

・第2章「テオドリック大王没時（526年）までの教皇とローマ」

ここでは、東ゴート王国の王テオドリックの死までの期間が扱われている。著者自身が初めて述べているが（邦訳：25頁）、この区分を設定した理由として、テオドリックが自身を西ローマ帝国の後継者として位置付けて統治行為を行っていたことと、彼の死によって勃発した戦役の結果としてビザンツ帝国のローマ教会に対する支配が始まったことを挙げている。すなわち、著者は526年に教皇権にとっての古代と中世の境目を見出しているのである。本章では、都市ローマにおけるキリスト教化の貫徹、ローマ司教の政治的地位の確立、教皇首位権の教説の出現という三つのテーマが中心となっている。

・第3章「ビザンツ支配下の教皇権（774年まで）」

本章は、本訳書では73頁から118頁までと最も長い章となっている。ここでは、ローマ教会に対するビザンツ帝国の支配の実態が描かれ、774年にフランク王国の王カール（大帝）が自らをランゴバルド王と名乗るまでの時代が扱われている。この章は二つの節に分かれている。1節「教皇コンスタンティヌス1世在位期（715年）までの教皇権」では、ローマが帝国の支配下にありつつも、皇帝から重要視されなくなっていく過程が描かれている。2節「グレゴリウス2世在位期からランゴバルド王国の終焉まで（715～774年）」で強調されていることは、ローマ教会がビザンツ皇帝権から独立して、イタリア半島の広範囲を世俗支配者として自ら治めたことである。しかし、その一方で、ビザンツやギリシア系の諸要素が、法、典礼、芸術、行政などの面でその後何世紀にもわたってローマ教会に残存したことも強調されている。

<sup>5</sup> ゲオルク・シュトラック（菊地重仁訳）「教会「改革」から宗教「改革」へ――盛期・後期中世における教皇権」『史苑』第75巻第2号（2015年3月）、387～388頁。

#### ・第4章「カロリング朝支配下の教皇権（774～904年）」

本章は、800年のカール大帝の戴冠の重要性はもちろんのこと、教皇権とフランク王国が結びついたことによる様々な影響が記されている。すなわち、フランク王国からの影響を受けてローマ教会の典礼が変化したこと、教皇を頂点とする階層秩序が生まれる中で、後の教皇首位権へと繋がる言説が生まれたことなどである。また「フォティオスのシスマ」が生じたことでビザンツ帝国との関係が一気に悪化したことが記されている。

#### ・第5章「ローマ貴族影響下の教皇権（904～1046年）」

本章では、16世紀から継承されてきた「暗い世紀」としての10世紀のイメージを覆す試みがなされている。そして、この時期の都市ローマ、中・南部イタリアの情勢変化と、免税特権や教皇特使の多数の利用が後の教皇権の発展にとって重要であったとして、従来の研究とは異なり、この時代に積極的な評価を下している。

#### ・第6章「いわゆる「叙任権闘争」期の教皇権（1046～1123年）」

本章は、「叙任権闘争」ないしは「グレゴリウス改革」の時代である。この時期に西方教会は普遍教会として理解され、理論上は教皇に従属することになった。また、教皇を支えるものとして枢機卿団と新たな教皇庁の組織が出来上がったことも重要である。そのような制度的な変化は教皇庁を国際色豊かなものとしたため、教皇は都市ローマから距離を置くようになったのである。さらに、聖俗関係論の再解釈によって「国家と教会」の対立が叙任権闘争という形で明確になった。このような教皇庁の姿が描かれており、この時代に起きた数々の変化を知ることができる。

#### ・第7章「教皇の権威の構築（1124～1198年）」

本章は、大まかに言えば12世紀全体を扱っている。この時代に、いかに教会法の発展とともに教皇庁が教皇権の基礎を拡充したか、いかに教皇庁が制度的な発展を見せたか、これらの点が強調されている。それによって、インノケンティウス3世の治世における教皇権力の絶頂期へと進む過程を明らかにしている。

#### ・第8章「権力の絶頂期の教皇権（1198～1303年）」

本章で、著者は最初の教皇インノケンティウス3世と最後の教皇ボニファティウス8世を比較し、「教会と国家」の関係がこの時期に大きく変わったことを強調して、13世紀の教皇権に起きた変化を説明する。そして、章のタイトルは「権力の絶頂期の教皇権」としながらも、全体としてこの時代の教皇権は衰退していくものとして描かれている。とりわけ、フランス王フィリップ4世とボニファティウス8世との争いを重視し、そこに教皇庁史における大きな転換点を見出している。

#### ・第9章「アヴィニョン教皇庁時代（1303～1378年）」

本章が時代区分の点で興味深いのは、ベネディクトゥス11世の治世（1303～1304年）をこの章に組み込んでいることである。フランス語圏の研究者は、アヴィニョン教皇庁を語るとき、アヴィニョンに最初に到着したクレメンス5世の治世（1305～1314年）から始めることがほとんどである。シンメルプフェニヒは、教皇権の失墜と教皇宮廷のアヴィニョン移転を一連の出来

事として認識している。本章は、教皇庁のアヴィニョン移転からローマへの帰還までを扱っているが、従来の「教皇のバビロン捕囚」というネガティブな評価を修正し、アヴィニョンの地は行政機構の効率的な発展に大きく寄与したとして評価している。

・第10章「シスマと改革（1378～1447年）」

本章は、大シスマの始まりからコンスタンツ公会議によるその終息、そしてバーゼル公会議の開催に伴う西方キリスト教世界の分裂が扱われている。12世紀以来教会法学者が作り上げてきた公会議主義の考え方が大シスマの解決のために広く支持され、墮落しているとされた教会の改革を目指して教皇権を一度は制限する方向に向かうものの、最終的には教皇権が勝利する形で幕を閉じる過程が描かれている。また、大シスマにおけるそれぞれの派閥の教皇と各世俗権力との繋がりが記されている。

・第11章「再興とルネッサンス（1447～1534年）」

本章は最後の章であるが、いわゆるルネッサンス教皇の時代である。教皇庁の都市ローマへの定着に際して行われた都市の復興、人文主義者の活躍、芸術に対するパトロネージなどが最初に説明される。こうした活動を支えるために、教皇庁は教皇領を財源として利用し、縁者の登用を積極的に行うようになったが、こうした教皇庁のあり方に対する不満が最終的には宗教改革や教皇の支配権の縮小に繋がる様子を記している。特に在地教会に対する教皇の影響力の低下が詳しく書かれている。

以下では、2009年以降に新たなに盛んとなっている中世教皇庁に関するテーマを一つ取り上げて、本書が描こうとする中世教皇庁の実態について補足をしたい。それは、枢機卿である。本書でも彼らについてところどころ取り上げられているが、彼らの重要性が十分に評価されているとは言えない。

現在とは異なり、中世の枢機卿は教皇選挙以外にも教皇庁内外で教皇を補佐する人物として、大きな政治的影響力を持っていた。11世紀半ばの「グレゴリウス改革」以降、それまでは教皇が都市ローマで行う典礼に参加するだけだった聖職者の職には、改革教皇が自身の政策遂行のために有能な人物を据えるようになった。彼らは教皇の政策に対して助言を与えたり、教皇の代理として西欧キリスト教世界各地に派遣されて現地で任務を行ったりなど、教皇が西欧キリスト教世界の長となることに大きく貢献した。西欧キリスト教世界各地と関わる必要が出てきた教皇にとって、このような人々は非常に重要だったのである。そして、1179年に開かれた第三ラテラノ公会議の決議で、教皇選挙権が枢機卿団（司教枢機卿、司祭枢機卿、助祭枢機卿）にのみ与えられたことによって、彼らは新教皇の選出を通じて教皇庁という組織に対してさらに大きな影響力を持つようになった。13世紀以降になると彼らの人数は減少して寡頭化し、彼らは党派を形成しながら、自らの出身家門や彼らと繋がりのある人々が様々な恩恵を得られるようにするため、教皇庁政治のあらゆる局面に関与するようになった。大シスマを引き起こしたのも彼らが最終的に二人の選出したからであり、また大シスマを収束させるための努力（ピサ公会議、コンスタン

ツ公会議など）も彼らを中心になされたのである。公会議主義の思想においては、常に開催することができない公会議の代わりに、枢機卿らには教皇の活動を監視するための役割が期待された。このように、盛期中世以降、枢機卿は教皇庁政治の表舞台に立ち続けたのである。

こうした枢機卿の重要性にも関わらず、彼らに関する包括的な研究は存在しなかった。中世の枢機卿研究は、17世紀に各枢機卿のプロソポグラフィ研究から始まり、中世に活動した個々の枢機卿の名前と枢機卿職は明らかにされた。その後、1896年にヨハネス・B・ゼークミュラーが11世紀から13世紀までの枢機卿について多面的な分析を行い、現在の枢機卿研究の基礎を作り出した<sup>6</sup>。20世紀になると彼の作り出した枠組みに沿って研究の深化が進んだが、各国史的な視点から各国の研究者が着目する時代には偏りがあったため、研究成果の統合がなされずにいた。そして、2011年にユルゲン・デンドルファーとラルフ・リュッツェルシュヴァーブが編者となって、これまでの研究成果を統合する形で中世の枢機卿についての最初の概説書を刊行したのである<sup>7</sup>。その後、2013年には彼らのグループは盛期中世から初期ルネッサンスにかけての枢機卿に関する論文集を刊行した<sup>8</sup>。このように中世の枢機卿について概観ができるようになったことで、枢機卿というテーマは今後の教皇庁研究において間違いなく発展していくテーマとなるだろう。

枢機卿に着目することが、教皇庁研究にどのような影響を与えるのだろうか。既に述べたように、とりわけ13世紀以降になると、枢機卿は教皇の政策を支えるだけでなく、自らが積極的に教皇政治を動かすようにもなっていた。同時に、この時代は教皇の空位期が長期化する傾向にあったが、その間は枢機卿が教皇庁の政治を運営していたため、彼らの活動が教皇庁の史料に残りやすい。しかし、教皇在位期では、教皇庁が政策を決定するときには「余の兄弟ら（＝枢機卿）の助言に従って *de fratrū nostrorū consilio*」という文言しか教皇文書に付されず、あくまでも政策の最終的な決定者は教皇であるという体裁が取られていて、枢機卿が政策決定においてどのような役割を果たしたのかをそこから読み取ることはできない。枢機卿の活動を探るためには、教皇文書だけでなく、彼ら自身が教皇庁内外の人間とやりとりした書簡や年代記などの叙述史料を分析する必要がある。教皇庁の政策決定において枢機卿が果たした役割を実証的に明らかにする研究が蓄積していくことで、これまでの主流である、教皇庁の政策を教皇の政治的意図だけに着目して説明するような教皇庁史の記述の方法は変わるであろう。このように、枢機卿の活動に着目することで教皇という存在を教皇庁の中で相対化することが、中世教皇庁の実態のさらなる解明に繋がる一つの方法であることは間違いない。

<sup>6</sup> J. B. Sägmmüller, *Die Thätigkeit und Stellung der Cardinäle bis Papst Bonifaz VIII.*, 1896.

<sup>7</sup> J. Dendorfer and R. Lützelshwab (eds.), *Geschichte des Kardinalats im Mittelalter* (Päpste und Papsttum, vol. 39), Stuttgart, 2011.

<sup>8</sup> J. Dendorfer, R. Lützelshwab and J. Nowak (eds.), *Die Kardinäle des Mittelalters und der frühen Renaissance* (Millennio medievale, vol. 95. Strumenti e studi, n.s. vol. 33), Firenze, 2013.



次に、本書の邦訳が出ることの重要性を述べたい。我が国においても、教皇庁の権力や権威が中世ヨーロッパ世界において各国の枠組みを超えて普遍的な影響力を持っていたため、教皇庁という存在は中世ヨーロッパ史を理解する上で極めて重要である、ということはある程度理解されてきたと思われる。しかし、よく知られているように、日本における教皇庁研究には十分な蓄積があるとは言い難い。野口洋二『グレゴリウス改革の研究』（創文社、1978年）、関口武彦『教皇改革の研究』（南窓社、2013年）、藤崎衛『中世教皇庁の成立と展開』（八坂書房、2013年）、これら三冊の大著が専門の研究書として挙げられる。それでも、それぞれが対象とする時代は、11世紀後半、11世紀後半から12世紀前半、13世紀となっており、中世全体をカバーするには程遠い。また、内容面でも政治史や制度史の面に限られている。それだけでなく、中世教皇庁の概説は、藤崎氏がジェフリー・バラクロウの概説書（G・バラクロウ『中世教皇史』八坂書房、2012年）を邦訳するまでは英語やドイツ語の概説書に頼らざるを得ず、個々の研究文献も、主に英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語などの多数の言語で書かれており、かつその蓄積は膨大であることから、中世教皇庁の実態を包括的に把握することは、一般読者や学部生、さらには研究者にとっても非常に困難なものであった。まさにこのことが、我が国における教皇庁研究の発展を妨げてきた要因と言える。

こうした状況を鑑みれば、本訳書が持つ意義は我が国において非常に大きい。シンメルプフェニヒ自身が冒頭で述べているように、本書は教皇と世俗支配者の対立についてはほとんど触れていない章があるが、その点に関しては前述のバラクロウの著作が補完するものとなる。それゆえ、これら二冊を合わせて読むことが望ましい。また、本書では著者自身の専門でもある典礼の歴史、その他には中世教皇庁に関する社会史や文化史などの様々な分野からの視点も詳述されているため、中世教皇庁を包括的に日本語で理解することが可能となるのである。

原著と比べて、本訳書はいくつかの点で読みやすくなるような工夫がなされている。まず、本訳書では、各章の中に小見出しがつけられている。そのことによって、読者は自身が必要としている箇所をすぐに見つけることができる。同様に、文中に適宜付されている訳注や巻末には人名や書名などの詳細な索引が付けられているが、こちらも非常に有用である。ただし、本書では訳語の統一ミスなどが見られるため、注意が必要である。例えば、本訳書 274 頁に出てくる「スキアラ・コロナ」という人物は、正しくは「シアッラ・コロナ」であり、255 頁の「シアッラ・コロナ」と同一人物である。さらに 13 世紀に教皇庁が教皇領を実効支配するまで、イタリアの勢力図はめまぐるしく変わっていたので、その様子を可視化する地図があるとなお良かったであろう<sup>9</sup>。

最後に、"Papsttum" という言葉の訳について考えたい。本訳書では文脈に応じて、この言葉を「教皇権」ないしは「教皇庁」という言葉で訳出している。クラウス・ヘルバースの概説書の索引では、"Papsttum/Papstamt/Petrusamt (*principatus, princeps apostolorum*)" という項目があり、

<sup>9</sup> 教皇領の地図は K. Herbers, *op. cit.*, pp. 345-347 などでも参照することができる。

この言葉は、本来、聖ペトロの後継者とされたローマ司教ないしは教皇の役職そのものを指す言葉と認識されているようである。ただし、実際に教皇庁に関する他のドイツ語文献に目を通すと、教皇の権利ないしは権威を表していたり、教皇と彼の業務を支える組織全体を表していたりと、この言葉はいくらか幅広い意味で使われているように思われる。また、教皇庁という言葉の定義にも注意が向けられるべきである。藤崎氏は、11世紀末の教皇ウルバヌス2世の治世（1088-1099年）における「クリア curia」という史料言葉の出現と、教皇の職務遂行を補完する行政機構である「教皇庁」の明確な誕生を結びつけている<sup>10</sup>。確かに、ウルバヌス2世は自身が大修道院長であったクリュニー修道院の行政制度をローマ教会に持ち込んだとされ、それまで存在していた様々な役職が新たな役職に取って代われ、我々がよく知るように、この新たな制度はその後アヴィニョン教皇庁において大きな制度的発展を遂げた。しかし、本書の記述からも明らかなように、教皇の職務遂行を支える役職や制度自体はそれ以前からも存在していた。こうした機構は「教皇庁」と呼ぶことはできないのだろうか。"Papsttum" という単語をどのように訳し、それに関連して「教皇庁」という言葉をどのように定義するかは、我が国の教皇庁研究において議論されるべき重要な課題の一つであると言える。（本訳書では「クリア」という単語を「教皇宮廷」と訳している。よって、6章より前で（邦訳：83、138頁）「教皇宮廷」という言葉を使うべきではなかっただろう。）

本書の持つ多角的な視点とその網羅性によって、個別の研究が進んで行く中でその研究が中世教皇庁史の文脈でどのような位置付けにあるのかは、この本に立ち返れば、すぐに理解できる。それゆえ、本書は入門書以上の価値があるものであり、初版から30年以上経過した今でも高く評価され続けているのだろう。筆者の該博な知識と膨大な情報をまとめ上げる文章力に感服するばかりである。そのような文献を平易な日本語で読むことができるのは非常に喜ばしい。また、訳者と同様に、本訳書の刊行によって中世教皇庁に対する関心が我が国においてさらに高まることを、教皇庁研究に携わるものの一人として評者は大いに期待している。それだけではなく、「訳者あとがき」に「中世のローマ教皇庁の制度を実証的に研究することは、教会がいかに中世の現実社会に影響を及ぼし、また中世社会において教会がいかなる役割を果たしたかを知る上で極めて重要なテーマとなる。」（邦訳：357頁）とあるが、本訳書が刊行されることは、我が国の教皇庁研究だけにとどまらず、西洋中世史の幅広い分野の研究の発展に繋がることは間違いないだろう。

<sup>10</sup> 藤崎衛「ローマ教皇とカトリック教会」藤内哲也（編著）『はじめて学ぶイタリアの歴史と文化』ミネルヴァ書房、2016年、174頁。